

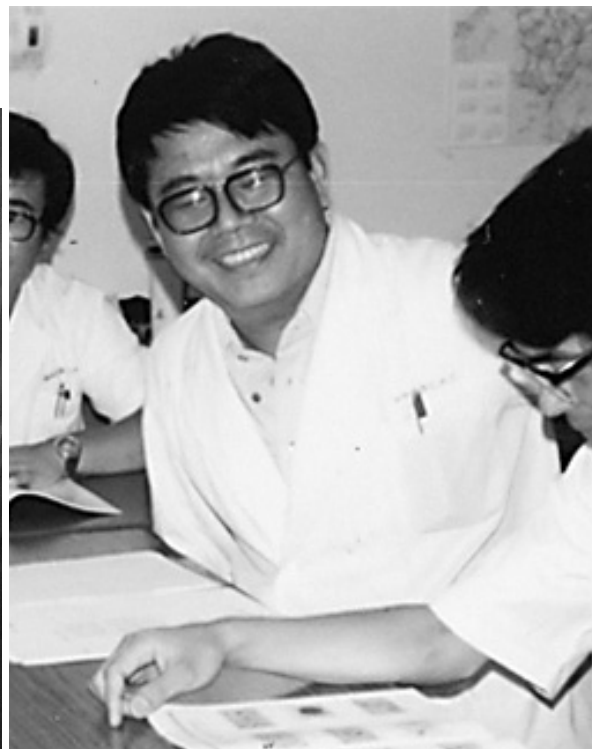
駆け出し2人が人生賭けた臨床検査への道

創業物語

地域医療の“縁の下の力持ち” であり続けたい

江川 洋 シー・アール・シー会長兼社長

創業物語



（福岡臨床検査センター当時の江川。技術スタッフと勉強会を開催する日々だった）

「ここまで来たのは、まさに強運そのもの。振り返れば多くのお取引先関係者の方々や社員、仲間の顔が次々に浮かんでくる。改めて、人との“ご縁”が会社を存続させてくれたと実感している」
2013年、新年冒頭あいさつは感謝の気持ちから始まった。

臨床検査業界では西日本地区トップクラスの実績を持つ(株)シー・アール・シー。現在、大阪や九州一円に20支所を展開し、従業員数は275人、取引先は医療機関や企業など5000件に上る。その始まりは、たった2人で血液検体を回収し、6坪一間の事務所兼検査室で悪戦苦闘する日々からだった。

4年後の「創業50周年」に向け、地域医療に貢献し続ける江川の挑戦とは。その原点を探ってみる。

福岡日赤病院時代の写真
左から2人目が江川



Aセット 肝機能検査	Bセット 肝機能検査	Cセット 肝機能検査	Dセット AST-ALT	Eセット AST-ALT	Fセット AST-ALT	Gセット 肝機能検査	Hセット AST-ALT	Iセット 肝機能検査	Jセット 肝機能検査
...
300点	360点	472点	710点	934点	1,171点	704点	852点	445点	627点
6項目	8項目	10項目	17項目	21項目	25項目	12項目	18項目	13項目	12項目
3ml	3ml	4ml	5ml	10ml	10ml	3ml	5ml	5ml	5ml

当時のセット検査一覧

27歳で臨床検査アウトソーシングを起業

「江川さん、今のままでいいのか？何か足らんと思わんか？俺には志がある。これからは大局を見て、大きく前に進まんといいかん」。植田孝雄は赤らめ顔で江川に食ってかかる。1963(昭和38)年、23歳の江川は九州大病院中央検査部から出向し、衛生検査技師として福岡赤十字病院の臨床検査業務に携わり、同僚の植田は薬品買い付け業務を担当していた。

仕事が終わる、時間が合えば2人で平尾の居酒屋によく通った。そして、杯が進むといつもこの話になった。「そう、ですよね」。江川は面倒くさそうに話をはぐらかす。植田はそれが許せないらしく、「江川さん、いつか必ず独立してやろうやあ。なあ」と激しく肩を叩きながら訴えた。

植田は江川より10歳も年上なのだが、なぜか江川に対し、ささぐり付けて呼んだ。上司と部下という関係でもない。対等に接する植田のさっぱりした性格に

親近感を持ち、互いに気が合った。そして、何気に聞き流していた話が4年後、実現することになる。

植田とは2年間、福岡赤十字病院で一緒に働いたが、江川が25歳の時、九大病院から現場復帰の要請を受けて転職した。その後、互いに連絡を取ることにはなかったが、2年ぶりに再会。

死中に活を見出した「出世払い営業」

1967年10月1日、植田と2人で「セントラル医学研究所」を創業。江川が代表となり、事務所は中央区山荘通りにある6坪一間、裁縫リフォーム店が退去した部屋を借りた。67年は全国青年医師連合がインターンシップ制度に反対し、国家試験を集団ボイコットするニュースや公害対策基本法の公布といった時代の移り変わりが激しい年だった。

この年、法整備で臨床検査業務は医療機関以外の民間でも受託ができるようになった。「今で

「どうだ、一緒にやらないか？」。植田の強い誘いに、ついに江川も同意した。

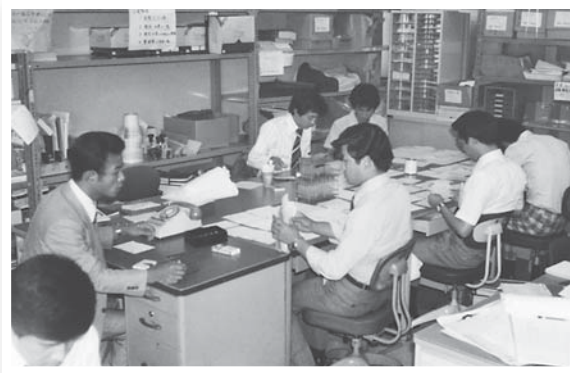
「この世の中だ。やればどうにかなるだろう」。何の構想も無く、再会による勢いだけで起業を決心したわけではない。だが、「あの時は本当に若かったな。怖さというものを知らなかった。植田さんの影響で独立したい気持ち持っていたが、今思えば無謀な賭けだった」と苦笑する。

こそ臨床検査を行う場合は衛生検査所に登録し、厳しい認定基準をクリアしないと行けないが、当時は開業も自由で広さや場所など特に規制が無かった。狭い部屋に実験台を置き、そこに漫然と検査機器や試薬を置いて血液やコレステロールなどを検査していた」

総額100万円の検査機器は出世払いで調達した。当時、サラリーマン月給が平均2万円だから大変な買い物だ。これまで世話になっていた川本器械店(現(有)川本医科器械)の社長、川本



1975年当時の検査室。自動分析機の導入で質の高い検査が可能になった



1975年、営業所内の様子

信康に相談する。「おう、あんたがそう言うなら、出世払いにしちやろう」。その場で快く新品を貸してくれた。借書も不要だという。

課題はまだあった。「試薬はどうする?」「俺が正晃の営業責任者を知っている。一緒に行こう」。植田が薬品買い付けの責任者をしてきた縁で、緊張しながら吉原課長を訪ねた。「よっしゃ、良かった。提供しましょう」。人徳というか、常識破れの「出世払い」という独特の営業スタイルを確立していたかどうかは分からない。しかし、そうした運を引き寄せる信頼性が2人にはあった。

「川本の親父さんは本当に男気のある人物だった。吉原さんも優しい人だったな。あの人がいなかったら会社は成り立たなかった」と江川は感慨深く振り返る。この縁がきっかけで正晃(株)とは先代社長・印正司と正哉の親子2代にわたり、主要な取引先となっている。

さて、開業当日。2人はまず取引先となるクライアント(開業医)を探した。互いに人脈あ

る医療機関が約30件あり、アポなし営業で訪問する。江川は中古2輪の「スーパークラブ号」に乗り、植田は視力の弱さから自動車免許が取れず、自転車で回った。「ぜひ、血液検査を当社で扱わせて下さい」。意外にどの医院も「ああ、いいよ」との返事だった。「あの頃は臨床検査ニーズも徐々に増えていたからね」。朝から夕方まで営業で検体を回収し、それから検査室にこ

不渡り手形から学んだ経営方針

もって深夜12時過ぎまで検査する毎日。「通常、集めた血液は翌日検査することが多いが、うちはその日にやってしまう。翌朝、バイクで検査結果を届けると、君のところは速いね」と。これで結構顧客が付いた。初日売り上げは1万2千円。約1カ月の給料分を1日で稼ぐという、予想以上に好調なスタートを切ったが、やがて江川に試練がやってくることになる。

その後も順調に受注件数と売り上げを伸ばし、翌年には中央区平尾15坪の事務所に移転。創業3年目には社員8人に増えた。大病院から1月10万円の大口検査を依頼されるようになり、喜んだのもつかの間、突然資金繰りに行き詰ってしまう。

実はこの病院では、集金の際の支払いが現金ではなく約束手形を発行した。江川はその手形で社員の給与を支給していたのである。ある月末、いつものように手形を集金し、その足で中金融業者に行った。銀行でな

く金融業者に行った方が手形割引制度に基づき、手数料は取られるが、その場で現金化してくれるからだ。ところが、その手形は不渡りで換金できないという。「この時初めてリスクの大きさと苦しさを味わった。結局、その月の給料は社員に払えず、耐えてもらった」。この時に営業方針が固まったという。「楽はしない、欲はかかない」と。

それから1件1件小さな依頼も進んで受けた。手間はかかるが、リスクの少なさが「企業成長の近道」と判断したからだだった。



南区長丘2丁目の本社落成式では江川が歌を披露した



1977年3月、南区長丘2丁目に初めて自社ビルを購入
この時期、社員100人を超えた

しかし、数はこなすが儲けが出ないことのジレンマも確かにあった。設備も不十分だし、収益性の高い細菌検査や特殊検査をするには多額の設備投資がいる。そこで、江川は九大病院を利用した。「九大病院には俺の同級生がいる。あいつにやらせれば、費用もかからないな」

早速、検体を九大病院に持つていく。「ここで検査してくれな

70年代は「医療制度見直しも教育も発展途上だった」

1970年、臨床検査に対する教育と医療水準の向上を目的に「衛生検査技師法の一部改正」が決定。江川も臨床検査技師の国家資格を取り直す必要に迫られた。衛生検査技師の資格だけでは検査を受託できなくなるため、仕事の傍ら勉強する羽目に。自信もないままに受験したところ、国家試験の内容が心電図検査や脳波検査、ラジオアイソトープ（放射性同位体）による検査と九大病院時代にやっていた内容と同じだったから助かった。

「試験時間1時間あったけど、10分で提出したよ。そういう

いか。頼むよ」「結果が出たら、電話で知らせてくれ」。頼まれた側からすれば、何とも身勝手な話だ。

「昨年、東京で同窓生20人が集まった会場で、皆さんに手伝って頂いたおかげで当社は生き残った。ありがとう」とお礼を言ったよ。みんな覚えていたな（笑）」

時可能となる自動分析機を導入し、検査需要の急増に対応。検査精度を格段に向上させ、多くの医療機関で採用されることになる。

創業5年目以降はさらに順調だった。「人が足りない」とガソリンスタンドをクビになり遊んでいる地元唐津の友人など片っ端にスカウトした。当時、国立病院の中には検査技師の経験は豊富だが、国家資格を持っていない臨時職員が多く働いていた。「そういう人たちを引き抜いた。

「同年、29歳の時に社名を「(有)福岡臨床検査センター」に改称する。71年にはTP（総タンパク）、肝機能のZTTやGOP、GPT、ALP（酵素）、総コレステロールの6項目を臓器別、疾病別ごとに必要な検査項目をまとめた「血液セット検査」を考案。72年には他社に先駆けてコンピューターを導入し、事務処理能力を向上。

また、4項目の血液検査が同

後に国家資格を取らせた」

医療高度化による制度見直しとドイツ医学からデータ重視のアメリカ医学へと教育転換を果たそうとする当時の状況は、医療業界でも極めて特殊な時期だった。

長男の威厳で2人の弟を招集

人数が増えると、組織も膨らむ。特に経理は重要度を増す。



1953年、浜崎中学1年生時の写真。トロンボーンを担当。後列右から2人目が本人



1943年、中国・大連で父・定男、母・アサ子と一緒に。前列左から二男の奏、本人

69年、江川は弟の奏(すすむ)に声をかけた。「会社を手伝ってくれないか?」

江川奏はこの時、伝票会計上場企業の株ミロク情報サービスに勤務していた。経理に精通しており、自分の片腕になって欲しいと思うものの、奏は翌年結婚を控える大事な時期だった。「大手とは待遇が違うし、潰れるかも知れんぞ」。「どの会社についても潰れるものは潰れる」と快諾してくれた。

74年には南区長丘の新築ビル1階80坪を借り、本社を移転。この頃、社名の「福岡臨床検査センター (Clinical Research Center)」を略して「福岡CRC」と呼ぶようになる。

移転の決め手は、73年の大水害で検査室が大きな被害を受けたこと。「あの時はまいったな。新川が氾濫し、あつという間に腰までつかった。実験台に乗せた機材は大丈夫だったが、台下の機器類は完全に浸水してしまった。試しに水道で洗浄し、乾燥させたら意外にも動いたよ(笑)」。国民健康保険の点数も

高く業績も伸びていたことから、「水害で悩まされるくらいなら」と思い切って引越した。

新事業も立ち上げた。微生物検査や病理検査、食品検査、水質検査など事業領域を拡大。それに伴い、グループ会社も増えていく。臨床検査は診療報酬改定(2年に1度実施)の点数に大きく左右される業種。「臨床検査が上手くない場合の新たな柱が必要だった」と江川は先を見据えた事業戦略の重要性を強調する。

77年には弟(三男)の護が経営陣に加わる。江川護は陸上自衛隊に所属していた。機械設

故郷・大連は「創業の礎」

江川は1940年7月8日、中国・大連市に生まれた。当時は満州国と称され、「満蒙開拓団」に代表される約212万人の日本人が移民し、大連には約8万5千人が住んでいた。江川は6歳までの幼少期をここで過ごす。終戦後の引き揚げは困難

を極め、ソ連軍の監視下にあった、引き揚げ許可が下りたのは

備が専門で、江川にとって機材の調達や資産管理など、一般に言われる管財部門で貴重な存在だった。「この時は、半ば強制だったな。俺と一緒にやれと。長男の力は幾つになっても強いから(笑)」

これで江川3兄弟がそろろう。長男の江川は人材・技術部門を、二男・奏は経理部門、三男・護が管財部門とそれぞれ役割を分担し、江川を盛り立てる。「毛利元就の3本の矢ではないが、*モノ*、*金*のバランスがたまに上手くいった」。江川は素直にそう感じている。

終戦から約1年半経過した47年2月。「大連の家の近くにソ連軍の戦車が駐留して、うかつなことをすると殺される。怖かったな。南満州鉄道の職員だった父は仕事を無くし、食うや食わずの生活だった」

生活の糧は身の回りの衣料品、両親が乳母車のような物に洋服を乗せて、大連駅前へと売りに



20歳前後の写真。学生時代は九州の山登りに熱中した



1958年、唐津東高校時代はテニス部に所属。前列右端が本人

行く。その間、6歳と3歳、1歳の兄弟はじつと親の帰りを待っていた。服が売れないと飯が食えない。時には夜中になることもあった。「あの時の光景は忘れられない。3人必死で空腹に耐えたからね。ハングリー精神の原点はここにあるし、兄弟のまとまりもそうだ。今の人に食べるために働く」と言ったら笑われるかもしれないが、当時の我々の目的ははっきりしていたよ」

引き揚げ船は夕方に大連を出港。貨物船に持ち込めるのは1人1つのリュックサックのみ。船倉は人で埋まり、やっとゴロ寝ができるほど。2月の日本海は大荒れで、引き揚げ者たちを悩ませたという。5日後、佐世保港に到着。日本に足を踏み入れた早々、シラミ対策でDDT（有機塩素系殺虫剤）を頭から全身に散布された。「あれは農薬だよ。あんな危険なもの、よくかけたな（笑）」

その後、江川一家は父親の実家がある佐賀県東松浦郡浜崎町（現唐津市浜玉町）に移り住む。

「大連には良い思い出が無いのはと聞かれるが、決してそんなことはない。6歳まで育ててくれた場所だし、地域の人にも恵まれた。その恩に医療という形で報いたい」。江川はそう言いながらほほ笑む。

江川は引き揚げ後、地元の小中学校を経て、佐賀県立唐津東高校を卒業。家計を助けるために進学はせず、浜崎町役場へ就職した。弟や妹のために頑張っている両親の助けになればと働

奉仕の精神と情報収集で難局乗り切る

始めた。しかし、ある時先輩から「おい江川、お前は本当にこのままでいいのか？」と将来について尋ねられた。ちょうどその頃、九州大学に衛生検査技師養成学校ができることを知った。学費は無料だという。

家族のこと、自分の将来のこと大いに悩んだ結果、受験を決意。猛勉強の末、九州大学医学部附属衛生検査技師学校に合格。役場を退職し、新たな道を歩み始めることになる。

初めて自社ビルを購入したのは、創業10周年にあたる77年。南区長丘2丁目の敷地60坪に3階建て本社ビルが竣工した。社員も100人を超え、「よくまあ、やってこれたものだと、感激ひとしおだった。保険点数も上がり続け、この頃一番勢いがあつたな」

ところが、81年の診療報酬改定で生化学検査項目の包括化と点数引き下げが決定。これまでの売り上げが半減する状況に陥ってしまう。中小検査センター

の大半が経営難になり、倒産や事業譲渡を申し出る同業者が増えていく。業界淘汰の波は社員120人を擁する江川にも容赦なく襲ってきた。「検査量を今の倍やるしかないな」。小規模検査センターの吸収合併や業務提携を重ねて、検体数を増やした。しかし、「社長、検体数が多くない過ぎてフルタイムでやっても間に合いませんよ」「…」。やはり、24時間体制でやるしかないですね…。社員の1人が静かに言った。江川はその一言に感

江川 洋 シー・アール・シー会長兼社長

プロフィール

1940年 7月8日 中国・大連市に生まれる

引き揚げ後、父の実家である佐賀県東松浦郡浜崎町に移住
佐賀県立唐津東高校、九州大学医学部附属衛生検査技師学校を卒業
九州大学病院中央検査室勤務を経て独立

67年 10月1日「セントラル医学研究所」を2人で創業

70年 社名を「(有)福岡臨床検査センター」に改称

71年 「血液セット検査」を考案

74年 南区長丘の幸宏ビルに会社移転。「福岡CRC」という略称を採用

77年 南区長丘2丁目に初の自社ビルを竣工。社員100人を超える

84年 夜間緊急検査サービスを実施

85年 社名を「(有)シー・アール・シー」に変更

88年 東区松島3丁目に総合研究所を竣工

90年 「健康増進テニス大会」の前身となる「第1回MSPテニス大会」を開催

91年 有限会社から「(株)シー・アール・シー」に組織改編

93年 中国・大連医科大学に「日中臨床病理中心CRC」設立

96年 久留米研究所竣工

97年 (社)日本衛生検査所協会において同事業の功績が認められ、厚生大臣表彰を受賞

99年 常用検査依頼書件数1万件突破

2004年 大連市・遼寧友誼賞を同時受賞

2010年 (社)日本衛生検査所協会活動を通じ長年の功績が認められ、旭日雙光章を受章

「そうすること
で、医師会やほ
の2月中旬に発表
されることから、
4月1日付で新た
な点数になる資料
を厚労省から入手
し、福岡にファッ
クスする。本社内
では担当社員が徹
夜でコピーし、翌
日には取引先に配
付した。」

「検査手法はこれから劇的に変
わる。競争は付きまとうもので、
今後も切磋琢磨し合う努力をし
なければならぬ。将来の方
向性を見出すために、勉強も欠
かせない。広い視野を持ち、現
場の意思を尊重すること。初心
忘るべからず、だね」
穏やかな表情の中に隠された
言葉の真意。重みを感じずには
られない。
(文中敬称略／構成・松岡泰成)

[参考資料] (株)シー・アール・シー創業40周年記念誌



松島総合研究所（福岡市東区松島3丁目）前にて。左から江川泰専務、江川洋会長兼社長、江川護常務

謝して、交代制勤務を採用する。そして、84年にその流れから他社が取り組んでいない「夜間緊急検査サービス」を事業強化の一環として実施することになる。「みんな無理してやってくれてたよ。あの診療報酬改定が一番ダメージ大きかったな。あの時、苦勞してくれた連中が幹部となり、今の会社を支えてくれている」

健康診断や食品検査など関連事業が順調に推移したことも、厳しい環境を乗り越えられた大きな要因となった。85年、

正式に社名を福岡臨床検査センターから「(有)シー・アール・シー」に変更する。江川は45歳になった。人の命に直接関わる臨床検査を取り扱う企業として、「日進月歩の医療技術にどれだけ対応できるか。最新の知識や豊富な経験を持つスタッフの育成、設備の充実も欠かせない」と東京に出向いては、(社)日本衛生検査所協会の理事として厚生労働省関係者に会い、情報収集を心掛けた。

2年に1度実施の診療報酬改定内容は、中央社会保険医療協

かのセンターより非常に速いスピードで最新情報を提供するこ
とができた。人に会って、会話
の中で新たな事業のヒントをい
かに見つけるか。その嗅覚、感
性を習得することが大事。まあ、
中洲の社交場でも結構お世話に
なっただけだね(笑)」

時間は少々先に進むが、同社
が株式会社組織改編したのは
1991年。創業メンバーで江
川を独立へと導いた張本人・植
田はというと、同社グループの
(株)九州ホスピタルサービス社
長を歴任後、93年6月に勇退。
現在もCRCグループの動向を
見守り続けている。